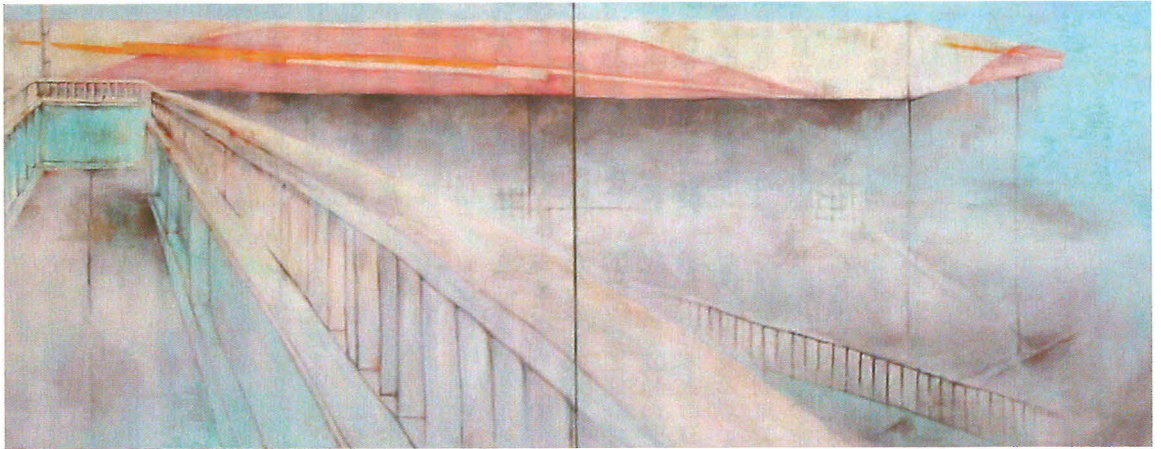


文化高知

2007年3月 NO.136



「陸橋」 今井 美琴

〈もくじ〉

大黄河……………	藤戸謙吾	2
ことばの保つもの……………	山本史也	3
世界のキュレーターと若き芸術家たち		
—第二回美術作品コンクールを終えて—……………	下山郁夫	4～5
大人の箱庭療法—有効性と深さ—……………	高野祥子	6～7
高知の女性の生活史		
「ひとくちに話せる人生じゃあない」はこうしてできた		
～次次世代を巻き込んで～……………	上野智子	8～9
地の名も無き偉人たち②		
明治維新时期・開明の先駆者—細川潤次郎のこと—……………	谷 晃	10
スペインの素顔1—グアダルベの章—……………	門田 彩	11
言葉の現場から②……………	井津葉子	12
1～2月の事業のご報告……………		13
風俗歳時記・風伯……………		14～15

(財) 高知市文化振興事業団

大黄河

藤戸謙吾

いろいろな旅が人生にはあります。国内外、どんな旅にしろ、新発見があり、旅人の心を癒やし、また元気にさせてくれることは確かなようです。

昨年、よさこいの夏祭りの後、お休みをいただき、「蒙古の風」を感じる中国北西部へ旅に出ました。「自分はこの地で生まれ、戦中日本に帰り、そして現地召集の父が戦死した最後の地、病院がここか」と、年甲斐もなく胸の高鳴りを感じました。訪ねた先は、張家口（河北省）、と大同（山西省）で、叔母と弟、私の三人旅です。大切なことながら、これまで果たし得なかった、共通の思い、目的があればこそ、「鎮魂の旅」へ誘われたと思います。

両親が、一九四〇（昭和十五年）年から四年、こちらで暮らし、大学を卒業後、父は現地の「蒙疆（もうきょう）電業」に勤務、社宅住まいでした。叔母の兄に当たりますが、昭

和十九年、現地召集され、「旧北京陸軍病院」で戦病死です。母が二歳の私を連れ、日本に帰り弟が生まれています。そんな因縁の地故、一度は訪ねたい思いが実現、これほど嬉しいことはありませんでした。

夕刻到着した張家口南駅は、北京西駅からノンストップの列車で三時間半。同じ日の朝、高知龍馬空港を出ましたので、早いものです。私には何の記憶も残っていませんが、夢に見た異国の誕生地を六十一年ぶりに訪ねたことになり、感無量でした。蒙古に近接、砂塵が目立つ北の駅頭の人の多さに驚く一方、若い女性の携帯電話と、ジーパン姿は世界共通のファッションだな、と妙なところ

に感心したことです。張家口では私が生まれた病院跡が軍関係の建物に、「蒙疆電業」跡が中国工商银行支店として現存していることを確認。石炭の町・大同は姉の誕生地ですが、ここでも現地のお

年寄りの親切で、両親が暮らした社宅跡も訪ね当てました。世界人口の五分の一の十三億の民、広大で悠久の歴史を誇る大中国。「北京」「東京」の緊張、対立はともかく、奥地の素朴な人情が身にしみました。

世界遺産「雲岡石窟」の石仏芸術にも驚きましたが、沿道で見たお椀を伏せたような、火力発電所の冷却塔の数々と、北京へ向けた巨大な送電鉄塔が、躍進中国の象徴として強く印象に残りました。「二〇〇八北京五輪」「二〇一〇上海万博」を控え、年率二桁近い経済成長の伸びを支える原動力です。昔、この地で父たちの「蒙疆電業」が現地の方々と共に、電源開発に頑張っていたかと思えば、立地のノウハウや技術の伝承に、日本人のDNAというか、先見の明を見る思いです。

大同から列車で六時間、北京に帰り最後は、父の命脈が尽きた病院跡の訪問です。高知から持参の線香やお米、地酒を手向け、「遅くなりましたが、やっと三人揃ってきました。母も、元気で」と手を合わせました。叔母や弟の目に光る涙に、若い中国人女性ガイドも「感動しました」。

異国の地でだけ一人肉親に看取られることもなく、逝って六十二年余



世界遺産山西省大同「雲岡石窟」

遺骨が戻り、埼玉の戦友（元蓮田市助役）が毎年のように墓参にきてくださいましたが、一昨年急に亡くなりました。現地でも父たち戦友仲間がよく歌った早春の「大黄河」を私と弟に教え、合唱した墓参が最後でした。

戦争の悲劇は、国を問わず、人を問わず、大きく長い傷跡を引きずります。戦後六十一年を経た夏、父の面影を残す憧れの大地・中国を列車で旅することができ、生涯忘れられることとはございません。旅は、人それぞれに、人生の句読点、応援歌ではないでしょうか。

（ふじとけんご／高知新聞社代
表取締役社長）

ことばの保つもの

山本史也

「背が堪う」「戸を立つ」「林檎を剥ぐ」といい、魚を、「いを」という。「堪う」は、十分に堪えうる状態にあることを示す。古く、戸は、引き閉じるものではなく、立て据えるものであった。「剥」の「リ」は、「刀」の形。獣の皮を刀で鋭く切りとることを示す。和語「はぐ」もまた、もとより、その獣の皮を剥ぐ音に準えてつくられた語であろう。ただ『万葉集』巻一六・三八八六に、「もむ楡を五百枝剥ぎ垂れ」の句が見え、すでに植物の皮を剥ぐことをいう語として用いる。源順『倭名抄』巻一九に、「魚 宇乎、伊遠」とあり、古くより「うを」「いを」の両訓を併用していたことが知られる。「堪う」「立つ」「剥ぐ」「いを」いずれも正しい語法に適用。これを卑俗な方言として斥けるいわれなどない。むしろ、その古態をとどめる語として、なお慣用することが望ましい。

かつて『地名でよむ土佐清水』と題して、市の広報に、いくらか私見を述べるがあった。沖本樵平補註『幡南探古録』は、「宗呂」の地名起源を、アイヌ語に見る。しかし、幡南（渭南）には、なお「奈呂」「津呂」の地名が残る。一定の地域において、同音の語をもつ地名は、これを一系列のもとに収めて、その起源が説かれるのでなければならぬ。『幡南探古録』説は、整合性を欠くもののように思われた。なにより私の情感が、その説を否む。「ろ」は、その地に寄せる人々の親愛を示す和語とすべきである。ほんとうは、その古人の地に託する深い思いの上に、私自身の郷愁（きょうしゅう）ときを、強いて、重ねあわせようとしていたのかも知れない。

土佐の地名は、つねに私を、あやしきいざなう。さて、そのいざないに、まるでゆだねるようにして、いつまでもつつまれているかと思つたのは、どういふわけだったか。



空虚が襲う夜（よ）には、覚えず書物のうちに、古代の土佐を掬（く）っている。逸文『土佐風土記』が、土佐高賀茂大社、朝倉神社の縁起を、玉嶋、神河の地名起源説話を伝える。土佐高賀茂大社は、一宮、玉嶋は、長浜に属する島、神河は、仁淀川に、それぞれ比定される。『倭名抄』巻九は、安藝、香美、長岡、土佐、吾川、高岡、幡多七郡より、併せて四〇の地名を例示する。あたかも地名一覧に似る。しかし、その著が収める、和食、安須、大忍、鯨野、その深奥には、さらに生動するものがあるように感ぜられてならない。

名（な）の字を、暗い夕べには、自ら口で名乗るのであるとする字源説は、俗説でしかない。名は、祝詞（いのち）を収める器と肉とを写す形。祭肉を薦め、祈禱して、祖霊より、名の認可を求め、める儀礼を示す。その儀礼を通じて、人は、はじめて、その家系につらなる者となる。名を得るといふことは、その家系のたどってきた歴史に参入し、かつ、それを重く負うことを意味する。「名に負う」「名を負う」とは、そのことをいう。人名が、その家系の歴史を負うものであるように、地名もまた、その地域共同体の歴史を、さらに重く負う。むしろ地名は、その歴史を共有する人々を統合する堅固な根拠であったとしてよい。

『土佐風土記』は、「玉嶋」の起源を、神功皇后説話に、「神河」の起源を、大神説話のうちにつなぐ。かくて地名は、神話の系譜に接続する。『倭名抄』に記す地名もまた、その地の歴史を負いながら、そのほとんどが、もとの名を保ったまま、いまに継がれる。そのことを、はるかに思うとき、私の空虚は、しずかに満たされてくる。

近時、容赦もなく行われる、あの奇抜を銜うかのような地名の変更は、すでに、その地の精神史を切断する冒瀆（ぼうとく）にひとしい。

（やまもとふみや／文字文化研究所
所研究員）

世界のキュレーターと若き芸術家たち

— 第二回美術作品コンクールを終えて —

下山 郁夫 *Concours des Tableaux*

第一回目を、岡山県立美術館館長の鍵岡正謹氏に審査をお願いし、予想を遙かに超える大作・力作が持ち込まれたことは、若い人達に、同コンクールが、支持された結果であった。

また、鍵岡氏は高知県民に縁が深く、第一回の審査員として最適の人選であったと思う。

今回は、金沢21世紀美術館の立ち上げで中心となった、長谷川祐子氏（東京都現代美術館事業企画課長）に白羽の矢を立て、審査をお願いした。

長谷川氏は、アメリカ・韓国・イタリア等でキュレーターとして活躍、現在、最も多忙な学芸員の一人である。キュレーターは、日本の学芸員とは違い、作品収集や展覧会企画にとどまらず、中核的な仕事でその専門性に対する権限の強さが認められており、欧米では、キュレーターの技量が、文化の流れを、一時代として位置づける、と言われる程である。

長谷川氏は、世界を視野に仕事をされていること、多摩美術大学教授として、若い世代の指導に当たられている点で、良かったと思う。

美術作品コンクールについては、第一回展の折に、その内容を詳細に

記してはいるが、今一度、簡単な説明にて述べておきたい。

出品資格は、県内在住あるいは県出身者で、十八歳以上三十五歳未満の個人とし、作品は平面作品にて、規格は二六〇cm×二六〇cm以内としている。最も変わっているのは、搬入された作品はすべて展示し、最終日、審査員による公開審査となる点である。

この様式の特徴は、各々の作品について、作家側からの問題提起を受け、審査員が的確に答える点にある。作家は、長谷川氏と、一対一で、対決することとなるわけだが、一刀両断にされるものあり、また、考え方は良いのだが技術面を指摘される者など、様々である。

作家としては、場合によっては満座の中で恥をかかされることにもなり、内心は穏やかではないはずだ。陰で「何よ、あの人！」という声も、耳に届いてきた。

この言葉を聞いた時、「良かった。長谷川氏に、お願いをして、本当に良かった」と思った。

長谷川氏は、現代の若者達を良く理解していて、本気の対応をしたのだと感じた。多忙な日々を、時間調整にて、来高下されたのは、若い作家達が好きだということ、世界で

活躍してきた長谷川氏が、キュレーターとしての役割に殉じたプロフェッショナルだったからであり、明日

を担う若き作家達に本物の価値（考え方）を、刺激として伝えてくれたと思う。

長谷川氏の、作品に対する、眼差しは鋭い。大作と小品を区別するこ

となく、等しく鑑賞することで、作品に敬意を払った。

このことは我々も理解しているのだが、いつのまにか、大作・力作に関心が向けられ、作者の意図する美意識を、遠ざけてしまいかねない、言わば危険性を孕んだまま、観てしまふ愚かさをも、正してくれた。

作品についての印象よりも、その本質

に重きを置くことで、描き手が、内在する心の動きを色彩と構成にてどのようにイメージしているかを判断、平面という限られたスペースに、自己を翻訳出来ていることが、画家として、最も大切な役割であることを、改めて考えさせられた。

それにしても、小気味よい動きと語り口は新鮮で、しかも労を惜しまない。作品に対する思い入れは、その作品を創造した作家への優しさでもある。

兎角、審査をお願い

いすると、当たり障りのない結果で終わることが多い訳だが、今回は単刀直入な指導で、是是非非を、はっきり意識させていた。

芸術の場合、他者に対する棘のような、あるいは、欠点だと思つてコンプレックスを持ち続けていた内面が、実は鍛えることによって輝きを放つことを、長谷川氏は、若い世代へのメッセージとし、金科玉条としているように感じられた。

最優秀賞は、今井美琴さんの「陸橋」に決まった。長谷川氏は「絵は現実そのものを描くのではない。画家がどうイメージしたかを表現するものだ。彼女の作品には、作家のイメージする原点が、素直に描き出されている」と審査評を載せている。優秀賞は、西村栄記さんの「家族」と山岡千春さんの「和み椿」の二点選ばれた。

第一回目を鍵岡正謹氏に、今回、長谷川祐子氏に、審査をお願いするも、お二人とも事業の趣旨に好意的であった。共通していることは、若い作家に対する厳しさと温かさであり、美術作品コンクールが、今後共そのような役割を担えたらと思う。

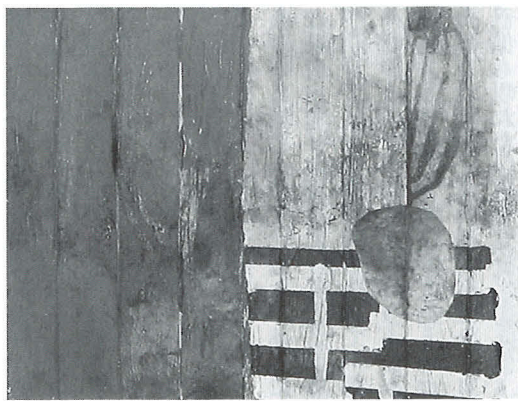
しもやまいくお／高知市文化プラザ 活性化事業推進委員・T O S A・美術アカデミー主宰



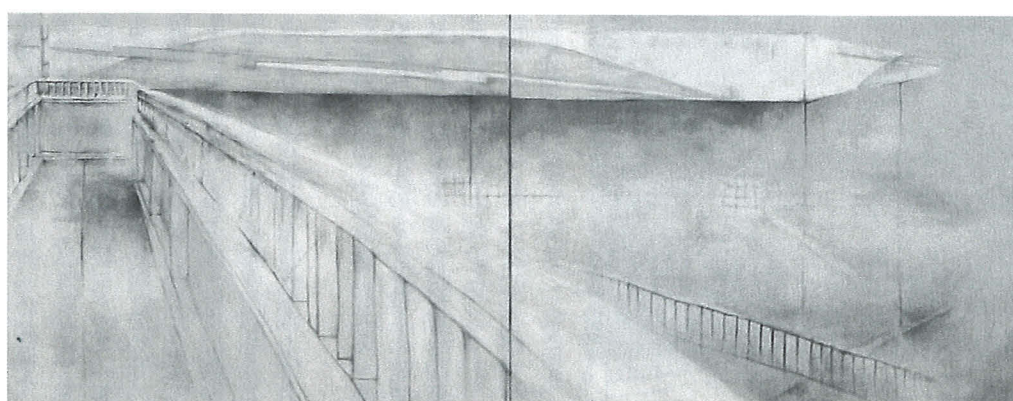
会場で作家を前に公開審査をする長谷川氏（右から二人目）



山岡千春「和み椿」



西村栄記「家族」



今井美琴「陸橋」

—有効性と深さ—

高野祥子

箱庭療法を始めてから三十年になる今、箱庭の深さと不思議さが強まるばかりである。

最初の数年は、子どもを対象としたが、言語表現の未熟さに対比して、みごとにイメージ表現をしながら変容を遂げた事例が多く、その実感から、箱庭療法の有効性を信じ、さらに関心を強めるようになった。

ほどなく、高知箱庭療法研究会が発足し、年次の研修会をもった。その際、会場係の女性から「箱庭というと植木屋さんの集まりですか」と言われたことを思い出す。

今は、箱庭療法を自ら希望して、高知心理療法研究所を訪れる方も増えた。治療者も、日本箱庭療法学会（創設後二十一年）の研修により自ら箱庭製作実習を行い、事例研究会で資質を磨いたすぐれた箱庭実践家も増えている。

次に、当研究所の来談状況によると、年齢制限はないにもかかわらず、来客をもてなす食事風景もつくられた。このように、一連の島のイメージは自我の成長過程を象徴していると思われる。

この頃になると、不安感は消失し、代わって焦燥感が怒りの感情として出るようになった。

最終期に入ると、更に宗教性の強い作品が生まれる。深い森に踏み入った夫婦が、泉の側で木の精に出会うのが発端で、次の作品は「釈迦の悟り」となる。悟りを開いた釈迦のところに、多くの仏や動物たちがよるこんで馳せ参じるイメージで、整然とした情景である。この二作品には、ヒビが登場していて、意外性を感じさせる。トリックスターとして登場したなと思っていると、本人も「タフでひょうきんで、ユーモアと温かさのある怪物に魅力を感じる。気に入る自分とは正反対のほうとしたところがよい」と語っている。

続いて、火口のある山が五回にわたってつくられる。まず高山の火口にタカが一羽とまっついていて、孤高の精神を感じさせる。次は、火山が噴火し、赤色綿花でつくった火炎が噴き出す。モスラが火口をのぞきこんでいる。同じ日に箱庭では表現の難しい滝行の絵を描いた。水勢の強い大滝の下で、自己像を思わせる男性

青年と成人が多くなっている。主訴別では、うつ病・対人障害・心身症・不安障害・強迫性障害および統合失調症などが多くなっている。

以下、不安障害に陥った成人の事例について箱庭を中心にして述べたい。公開に当たっては本人の快諾を頂いているが、生活状況については少し変更している。

◇多様な症状をもつ成人の箱庭療法

この事例は三十歳の男性で、子どもが二人いる四大家族である。下の子ともさんが、生後まもなく入院となり、奥さんは付き添うことになった。そのため三歳の長女を二カ月にわたって世話し、仕事と家事と育児を両立させるといって、大変な生活になったケースである。症状は動悸・不眠・予期不安などで、苦しんでいた。

この方は、箱庭療法を希望して来所され、第一回目は、中央を川が流

が一人、滝に打たれている絵である。これに関して、我が国に箱庭療法を導入した河合隼雄教授は、「不安を白雪姫で脱して、次に自我ができて、その自我が火と水とで洗礼の儀式を受けるといって一連の流れがある」とコメントされた。

この頃、「不安の根源は育児ではなく、死にある」と感じられるようになり、箱庭をつくっているうちに洞察が進んだ。実はこの方は最近続けざまに家族の死に遭遇していて、これまでも宗教性の高い作品がつけられ、現実には回復できない、心の親や祖父母との関係を回復していた。

三回目は、神々が火口に集まり鎮火の儀式を行う。四回目は、修行僧が噴火の収まった火口から、らせん階段を降りていく。深い谷底には赤い玉が置かれている。このように、火炎から赤い玉への変化は、怒りの感情がコントロールできるようなったことを示唆している。それと呼応するように、日常生活も気分がよいときと、普通るときが多くなった。

この後で、ヌミノーゼ（神秘的）体験のイメージとして、霧（白い綿花で表現）の中から立ち現れた大きな白馬と出会って驚く旅の男を表現する。つくった後で、「初めて、自

れる左右二つの世界で、それぞれに教会があり、牛と馬が少しいるだけの寂しい作品だった。それが回を重ねるごとに、水域が広がり、橋の数が増え、家や人も使われ、にぎやかになっていった。興味深いのは、三回目の作品から白雪姫と小人が出てきたことで、その後、数回にわたってこのストーリーが展開する。小人たちを送り出す白雪姫と、小人の行く手を妨害しようとする構えの魔女がいる。その二週間後につくった作品は、「幸運を運ぶ小人が街に帰ってきて、人々に歓迎されている」（以下同様にカッコ内は本人のこと）。

箱庭をはじめて三カ月余、トラを伴った修行僧が聖地に「到達」する作品をつくった。この頃になると入眠困難や途中覚醒などの睡眠障害は解消し、予期不安が軽減したが、動悸は相変わらず残っていた。

次の三カ月は、島のテーマが生じた。

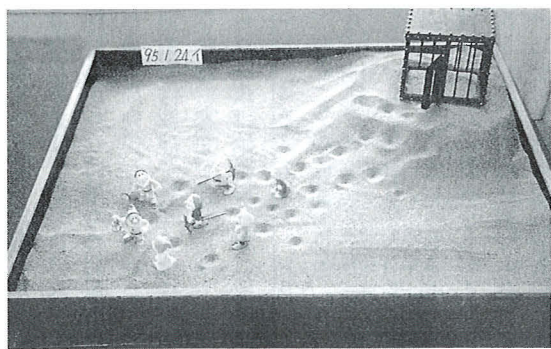
最初は、小さな寂しい島で、その洞窟でカメが孵化する。島はつくの度に拡大し、人や家が増えていき、集落から街にまで変化した。郊外には果樹が実り野菜畑や牧場もある。ヘリコプターや船が用意されて、外の世界とつながり孤島ではなくなつた。島も拡大し、海辺の大地となった。高台の家から世界を展望する自己像も現れた。家族の住む家を建て、

分との関係で神が置けた」と感銘を語り、同時に治療者も深い体験をすることができた。

五回目は、火口から観音菩薩が現れ出て「晴れの帰還」をした。癒やされて再生し、死をどう受けとめるかという大きな課題を、相手に収めたものと思われた。

この後、気分は「滑走するように好調」となり、箱庭では地蔵からたくさんの食べ物、七福神から宝船といった宝物を頂く表現をする。箱庭体験によって得たものを持って社会に帰っていくイメージだと思われる。

最後は、懐しい故郷の情景や、ス



最終作品「解放された小人」



「到達」聖地を訪れた修行僧

ケールの大きい海や宇宙の表現をした後に、解放された小人が深層界に帰って行く箱庭を置いた。思わず「これで終わりでしょう」と声をかけると、「わかりましたか。自分でも終わったと思いましたが」と弾んだ反応をし、終結となった。

◇箱庭療法はなぜ効くのか

箱庭は、なんとなく置きたいものを置いていくうちに、内的イメージが視覚化されていく。そして自作の作品を眺めているうち、いつしか内界との対話が始まるものと察せられる。この事例でも製作後にも似たことばを添えているように、自然に作品の流れや、物語性に自ら気付いていくものである。同時に、自我を育て、社会化し、内なる神に出会う過程を意識化し、より高次の人格へと進展をはかっているのである。

癒せない心的外傷を、箱庭の世界で象徴体験することで克服し、現代社会で機会の乏しくなったイニシエーション体験をして心の節目を超えていくなど、箱庭療法は大人にとって大変有効である。

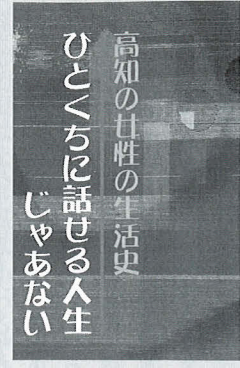
また治療者が深い共体験をするような作品が生まれることが多い。

（たかのすがこ／高知心理療法研究所所長）

高知の女性の生活史 「ひとくちに話せる人生じゃあない」 はこうしてできた

～次世代を巻き込んで～
〈連載第5回〉

上野智子



「高知の女性の生活史 ひとくちに話せる人生じゃあない」

◇索引を作る

この本が多くくの女・男、大人・子供たちに読まれることを渴望する、熱い感情と、さまざまな分野で引用されることをひそかに願う、冷静な感情とが、いつからか私の中に同居していた。そしていつしか、「読みたい」「引用されたい」の双方をかなえるためには、この作業が不可欠であることをほとんど確信するようになった。それは索引作りである。私の描いていた青写真は、「単語索引ではなく、事項索引に近く、しかもきめ細やかなもの」であった。この種の本にはふつう索引は付かない。多くの人々の体験談が綴られ、話者・書き手の総数は優に百名を超えた。個性を尊重し、文体もあえて統一しないという約束での自由なスタイルの語り文の集積体に、さて、どのような索引を付ければよいか。独自に立てた方針は三つある。

- ①女性に関わる事項を多く採る
 - ②時代の理解を促す語句を採る
 - ③高頻度の単語は連文節で採る
- ①は必然で、②は脚注にも反映するが、特色は③である。最近、私の専門分野（日本語学）では、読み手

側の便宜に配慮した索引が多く見受けられるようになった。内容把握の指針となり、引用時の利用価値はきわめて高い。

索引作りは、すべての校正が完了した後、本文が確定しページが決まらなければ始められない。出版までの時日を睨みながら、時間との戦いになることが必至であり、私一人の力では到底できそうにない。日頃接している学生たちをこの渦に巻き込んでしまおうという想念が私の中に急浮上した。話者たちのことを次世代に伝える好機でもある。

二十三名の学生の協力のもとに、索引作りがスタートした。各人が分担した範囲の、まずは熟読から始まり、次に掲出語句の選択、さらに表計算ソフトを使った語句の入力と並べ替え、その結果をメールで私のところへ送り届けるまでの一連の作業をわずか三週間で終えた。大学が薦めてきた学生のパソコン必携の利点を最大限に活かした連携作業の美果と言える。

完成までにはさらに逆引き作業と本文との照合、五十音配列のチェックなど、煩雑な作業の繰り返しを余儀なくされたが、送信されたデータを私の手で短時間で一挙に集約する能力の効率化は、やはりIT時代の

の恩恵と言えるだろう。が、パソコンが完璧でないこともまた然りである。漢字の読みに悩んだり、五十音配列に迷ったり、まるで人間くさい。「こんなはずではなかったのに」と、出張先にまで携帯しての、連夜の点検作業が、今となっては懐かしい。

◇索引を引く

では、その索引を引いてみる。例えば「戦争」は次のように出てくる。

戦死	42
戦死公報	143
戦時保育園	280
全女性に対する攻撃	287
戦前・戦中・戦後派	244
戦争が始まった	59, 130
戦争が始まって夫が徴兵に	61
戦争で大勢の若者が戦死	136
戦争で教師が足りなくなっている	215
戦争になるき、もう帰れんなる	212
戦争の大きな渦に巻き込まれていった	102
戦争の犠牲	168
戦争はいかん	67
戦争はいやぞね	178
戦争は絶対にかん	191
戦争は人間を不幸にする	190
戦争への虚しさ	21
戦争を憎む	131
戦争協力	296
洗濯は盥で洗い	145, 153

「戦争」で始まる部分のページが具体的な後続部分とともに列挙されている。「戦争が始まった」から「戦争を憎む」まで、十三カ所の記述が一覧できる。「戦争はいかん」「戦争はいやぞね」「戦争は絶対にかん」から女たちの叫びが聞こえてくるようだ。「戦争」の一語に括る方法では、決して期待できない効果である。

次に、「女」を見てみよう。「女だ」といつて「女でも」「女のくせに」

この部分だけでも、現代ではセクシャルハラスメントとして非難される。ましてや、「女に学問つけても灰すらも残らん」「女の蓄えはいらん」は、次世代の女子学生たちには、信じられないような意図不明のこぼれに違いない。しかし、「女に生まれたのは不利だ」になると、次世代の私が、十代から二十代の頃抱いていた感覚そのもので、さほど違和感はない。

女だといって馬鹿にされないように	144
女手一つ	259
女でも信念を持ってやれば何でもできる	28
女としての生きる道	19
「女に生まれたのは不利だ」	282
女に学問つけても灰すらも残らん	95
「女に勉強はいらん」	93
「女のくせに」	224
「女のくせにえらそうな」	109
女の子	270
「女の子かよ」	94
女の子の育て方	234
女の子らしゅう	210
女の蓄えはいらん	149
女の人にも選挙権	142

一九八二年以来減り続けていた「いざれ結婚するつもり」の女性の割合が初めて上昇に転じたと発表した。また、「独身はよくない」「結婚に犠牲は当然」などが男女とも前回調査を上回り、「家族や結婚を支持する意識に復調がみられる」と分析する。

結婚	99, 215, 230, 301, 308, 310
結婚機	264
結婚予防と母子衛生	310
血気盛んな男子ばかりの寮	118
結婚	19, 21, 25, 41, 43, 45, 48, 51, 59, 61, 64, 65, 68, 75, 76, 81, 83, 87, 98, 99, 105, 107, 114, 115, 119, 123, 131, 133, 135, 136, 137, 139, 143, 144, 145, 147, 149, 153, 159, 162, 163, 167, 180, 181, 188, 190, 194, 195, 197, 202, 213, 225, 233, 272
結婚差別	264
結婚式	137, 154, 162
結婚生活	143, 299
結婚退職制	317
結婚と同時に別の家に住んだ	147
結婚の話	128
結婚の申し入れ	68
結婚話	41, 68
結社	115
欠乏の生活	174

「結婚」は索引全体で最も頻度の高い語である。対照的に「離婚」と再婚の頻度は低い。離婚率が高いと言われる高知県だが、時代の移りゆきであろうか、この本の記述からその傾向を読み取ることは難しい。

◇索引を使う

「読まれる」「引用される」ための案内役を託した巻末の十四ページ。予想を上回る全二二三五頁が、和田書房の坂本美和さんによって、三段組みに収まった。装丁や本文はもちろん、脚注索引など細部に至るまで、この本は、編集者の力量が発揮され

たみごとに仕上がりになっている。索引を使って、これからどんな読み方ができるのだろうか。そのささやかな試みとして、索引作りにあたった学生たちが、現代の教育に繋がる問題の発見とその分析を行った。来年度は、はや平成生まれの若者が大学に入学する最初の年である。明治・大正生まれの女性たちの声が、昭和・平成生まれの人々にこれから感動と刺激を与え続けるだろう。

●戦争	●生命と保健
●移民・引揚げ	●人権問題
●選挙	●部落問題
●家制度	●識字教育
●良妻賢母	●教科書無償闘争
●躰と女子教育	●就学
●女性教員	●子どもの読書活動
●男女の平等	●昔の子どもの生活
●結婚の意義	●食生活
●出産	

現代の教育に繋がる問題発見の試み

もとをたざせば、私と学生たちとの協同作業は、古谷滋子「ソーレ」前館長の深いご理解なくしては実現しえなかった。索引に採る語句の選択もお願いしたところ、学生たちには採られなかった語句が少なからず含まれており、世代差をカバーする

ことができた。いよいよ印刷所へ入稿する前夜の、坂本さんとのファクスでのやりとり。そこには館長自ら詰めておられたこと。入稿当日は午前中まで、索引部分の電話での最終チェックに辛抱強く付き合ってくださったこと。あわせて、学生たちの作業のために、人数分の大量の原稿コピーを作成し届けてくださった実行委員会事務局、二宮愛実さんのご尽力も忘れられない。これらはすべて、実行力を伴った理想家肌の土佐の女たちが、そのDNAを明治から大正・昭和の時代へと確実に継承してきたことの明らかな証である。

うえのさとこ／高知女性の生活史作成実行委員会・高知大学人文学部人間文化学科教授



2月に発売された「耳で聴く高知の女性の生活史」あめんぼ朗読会による21話を収録

明治維新期・開明の先駆者 — 細川潤次郎のこと —

谷 是

土佐では、坂本龍馬のような「革命家」は高く評価されている。しかし早くから世界的知識を持ち、学者タipesの姿勢を堅持、新政府の確立に心魂込めて取り組んだ「文化の志士」は意外に知られていない。細川潤次郎（号十洲）などはその典型と言えよう。潤次郎は天保五（一八三四）年二月二日、高知城下、南新町（現桜井町一丁目）に生まれた。龍馬よりも一年歳上である。父は細川延平、号を清齋という漢学者。経史に暁通し、詩人としても高名であった。二男・潤次郎は父の資質をよく受け継ぎ、幼少より学問に精を出し、当時、岡崎滄浪、岩崎馬之助（秋溟）と並び、三奇童と称せられた。すぐれた天才肌の少年であったらしい。



細川潤次郎

父は家学を伝えると共に、藩校で学ばせたが、その才能をいち早く覚り、これからは洋学が必要だと説いて、安政元（一八五四）年長崎に赴かし、蘭学を学ばせた。父も頑迷固陋の儒学者でなかったことがわかる。同五年、彼はさらに江戸へ行き、幕府の築地海軍所の練習生となる。長崎時代の蘭学修得が、その資格を与えたことは言うまでもない。勝海舟の下で航海術を学び、文久元（一八六一）年には上海丸の航海長となったというから、実学の面も堪能で、中浜万次郎から英語を学び、その筆頭門弟になっていた。万延元（一八六〇）年一月、万次郎は咸臨丸に乗って通訳としてアメリカに渡った。その時、サンフランシスコに上陸して、書店に同行してもらい「ウエブスター辞書」を買ってもらったのが、福沢諭吉である。諭吉はその辞書が欲しくてたまらなかった。永い間の悲願で、そのために渡米一行に潜り込んで来たといっても過言ではない。その時、万次郎は他に二冊同書を買ったが、一冊は自分用、一冊は愛弟子潤次郎への土産であった。諭吉の持ち帰った同書が、その後慶応義塾の発足の基となるのだから、この一事は、

ろにあるグアダルーベは人口二千五百人ほどの実にひっそりとした町であった。そこには闘牛もフラメンコもない。陽気に近寄って話しかけてくる人もいない。あるのは、古く煉けた白壁に茶色の屋根、ところどころに見える剥き出しの木柱、そのような、およそ文明とは無縁の家々、ただそれだけが続く。そんな町に唯一といってよい大きな建造物が件のグアダルーベ修道院であった。ここは十四、十五世紀の美しいムデ

日本文化にとって大きな出来事と言っているが、他の一冊は、細川の机上に置かれたことになる。中浜がいかに細川に期待していたか、これを見ても明白だ。

潤次郎は一方では高島秋帆の門に入り、最後の弟子として、砲術を学んだが、やがて土佐に帰国した。藩政・吉田東洋は彼の学識に絶大な信頼を置き、藩の法律である「海南政典」「海南律令」の制定に参画させた。この事業は、膨大な、難解極まる作業で、国の内外に十分な見識のある細川の関与があつてこそ完成した大仕事であった。

明治維新後、彼は新政府における土佐藩の代表的な官僚として参画、民部権少丞、工部少丞などを歴任、米国にも派遣されたが、明治九（一八七六）年、元老院議員となり、その実力は刑法、治罪法の草案づくりなどに遺憾なく発揮された。これは外国の法律を読み取り、熟知して解釈し、それをどのように日本の法律に導入するかという困難な仕事で、彼のような人材であつて初めて成し得る、新政府への大きな貢献であった。

以後の細川は、明治二十三年の国会開設に際し、貴族院議員となり、翌年には副議長、その後、枢密院顧問官、女子高等師範学校校長、三十二年には学習院長心得ともなる。その後、明治天皇の詔勅や重要文書の起草を

続け、さらに法令制定の委員など諸役に関与する歳月が永かった。土佐の歴史著述も「細川頼之補伝」などがあるが、中でも「山内一豊夫人伝」は、山内関係の先駆的著作である。

今日、高知市桂浜、龍馬碑の近くに、土方久元の題詩、選文、書の「坂本龍馬彰勲碑」が建っている。それと並んで自然石で「忠魂護皇基の碑」があり、とこしへに国守るらんなき魂の皇后の宮のゆめに誓いて

という、龍馬を追慕した潤次郎の和歌が刻記されている。

文学博士、男爵、学士院会員などの名譽も得たが、大正十二（一九二二）七月二十日、九十歳で、堂々の往生をとげた。その知性と教養は、土佐第一級の人物で、すぐれた開明の先駆者であった。

今日、桜井町一丁目（旧南新町）の路上脇に、生誕地の棒柱が一基建っている。説明する添碑もなければ立て札もない。大半の人は何をした人かわからないで過ぎて行く。

龍馬や慎太郎だけが「志士」ではない。潤次郎のような「文化の志士」を敬仰する高知県人でなければどうするか。龍馬を観光に利用するだけの高知県民であつてはならないと、私は常に考えている。

（たにただし／土佐史談会副会長）

熱く、赤茶けた大地が広がる情熱の国、フラメンコと闘牛、あるいはイベリコ豚の美味しい国——スペインといえはそんなイメージがある。しかし逆にいえば、これらのイメージ以外、この国についてはあまり知られていない。事実、私もスペイン留学の機会を得、マドリッドに暮らしてみるまではこのような二面的なイメージしかもっていなかった。

しかし、スペイン国内を旅して周るうち、この国の多様性に驚かされることとなる。気候、文化、人々の性質、美術……どれをとってもなんと多様なことか！

まず、よく知られたプロトタイプのイメージは、南部のアンダルシア地方のものでしかなかったことを知る。確かにここは、イスラム文化が色濃く残り、いわゆるヨーロッパのイメージとは違ったなんとも抗いがたい魅力に溢れた地域である。が、しかし、である。それ以外の地域を見ずしてスペインを知ったといえようか。

そこで、マドリッド滞在中に訪れたスペインの各地域について印象に残っているものをいくつか書いてみる。（しかも三回にもわたって）私の稚拙な文章では不十分なことは重々承知だが、それでも、スペインのあまり有名でない地方を紹介することで素顔のスペインを少しでも感じていただけたらと思う。マドリッドからバスで四時間半のこ

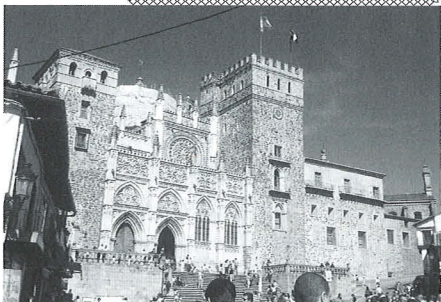
ろにあるグアダルーベは人口二千五百人ほどの実にひっそりとした町であった。そこには闘牛もフラメンコもない。陽気に近寄って話しかけてくる人もいない。あるのは、古く煉けた白壁に茶色の屋根、ところどころに見える剥き出しの木柱、そのような、およそ文明とは無縁の家々、ただそれだけが続く。そんな町に唯一といってよい大きな建造物が件のグアダルーベ修道院であった。ここは十四、十五世紀の美しいムデ

スペインの素顔1

グアダルーベの章

門田 彩

ハル様式（ムデハル）一四九二年のレコンキスタ終了後もスペインに居残りキリスト教の下で生きたイスラム教徒を指す）の回廊を持ち、中庭にはムデハル・ゴシック様式の聖堂がある、見事な修道院であった。しかし、この修道院の最大の見所はこれらではなく、カマリンと呼ばれる小聖堂に祀られている「メートル足らずの黒い聖母像であるという。これこそ、この町の人たちの誇り「全スペイン世界の守護聖母」なのだ。なにせこ



象徴とされてきたところだ。つまり、カトリック教徒であるスペイン人にとってこれほど誇りに思う聖母像はほかにない。実際の聖母像は、目鼻立ちが白人のそれであるのに対し肌は真っ黒で黒人のような外見というのが私には奇妙に思えた。

この町が年に一度だけ人々で賑わう日

がある。十月十二日の「スペインの日」だ。この日、スペイン国中から聖母を拝み大勢の人がやってきて町は騒然となる。聖母像を載せた山車、大航海時代の装いの男女を乗せた数十頭の馬が行列になつて町を練り歩く。小さなメイン通りは人で溢れ、観客も行列も身動きが取れなくなるほどであった。

グアダルーベは過疎化が進んだ町で、毎日の生活の中に活気はない。人々は町の宝物である黒い聖母像を世間にアピールすることなく、しかし敬虔に誇り高く守っている。盛大に祝うのは十月十二日だけだ。だがそこには偉大なキリスト教に対しての絶対的な信仰がある。あるいはインディオたちを改宗してあげたのだというゆるぎない自信さえも感じられる。彼らに、現在の「取り残された」町に対する自虐的な態度や、自らを哀れんだり皮肉つたりする姿は見られない。みなが真剣である。真剣に黒い聖母を守り続けている。

マドリッドにいますとあまり意識されないが、この国はまぎれもなくカトリック教国であるということにグアダルーベに来て思い出した。イスラム教を寛容し、様々な文化を融合という形で許容してきたスペインではあるが、その根底にはキリスト教が脈々と受け継がれている。そのことを私は強く感じたのである。

かじたい／東北大学大学院博士課程後期



日本語の乱れの中でやり玉にあげられる事多い「敬語」。苦手意識を持っていく人が多いのも敬語ではないでしょうか？ その敬語で、最近特に気になるのは「ていねい過ぎる表現」「過剰な敬語」です。

たとえば、自分自身が誰かにその場に合わない取って付けたような敬語をたくさん並べて話し掛けられた時にどう感じるでしょうか？ 相手に大事に扱われていると思うでしょうか？

逆に、居心地が悪くなったり、冷たく距離を置かれてしまったように感じたり、言い方によっては敵意すら覚えるかもしれません。

テレビ・ラジオの仕事でも、インタビューで敬語を使い過ぎたために相手を緊張させてしまったり、楽しい番組が堅苦しくなったり、楽り、という失敗がよくあります。

そんな不自然な敬語は、自信がない時に出てくる「不安な気持ちの裏返し」のような気がします。

「返し」のような気がします。ニュースなどで不祥事を起こした人の弁明などを聞いてみると分かりますが、具合が悪い事がある時に出てくる敬語は、決してお手本にはしてはいけません。

日本語の敬語表現は本当にバリエーション豊かで、その場に合った程よい敬語が自然に出て来る人と話をする心地良くてずっと聞いていたという気持ちになります。自分もそういう使い手になりたいと思いますが、それにはどうしたらいいか。

普段から「意識して話す事」でしょうか。特別な言い回しを覚えるのではなく、まずは「です・ます調」で一つ一つの言葉を大事に話す事。敬語を使うと考えるより先に人を見下したような表現や、乱暴な言葉、仲間内の言葉遣いはしないようにと心掛ける方が気持ちいい話し手になれるような気がします。

そういった努力抜きで、楽に敬語

を扱おうとすると「マニュアル敬語」と言われるような心のこもっていないワンパターンの表現になってしまいます。

たとえば「～させていただけます」。これはもともと自分ができるうとしてる事で、相手に負担や苦労をかけてしまう時に相手を思いやる言い回しですが、最近はそうでない時にもやたら出て来るので、むしろ耳障りに感じてしまいます。さらに語尾の活用を間違って「やらさせていただきます」や「聞かさせていただきます」などと言ってしまう事も少なくありません。このような場合は、だいたい「～します」「～致します」で十分でしょう。



他に「～の人」と言う所をすべて「～の方（かた）」にしてしまい「カタ、カタ、カタ、カタ」言っています。「人」を「人」と呼んで失礼な事はありません。名詞に必要な「お」や「ご」を付けてしまうというのも多いです。

そこで、スッキリと話すためにこの際「一文に敬語は一つ」と絞ったらどうでしょうか？ では、どこを敬語にしたらいでしょうか。

まず、「物より動作」です。「よいお着物を着ていますね」より「よい着物をお召しですね」がいいですね。それから前の方より「後に来る言葉」をていねいにする。「沢山の観光客が歩かれています」ではなく「歩いていらっしゃいます」が正しいでしょう。「拝見させていただきます」もよく言う言葉ですが「拝見する」が敬語なので「させていただきます」が敬語なので「させていただきます」は必要ありません。「二重敬語」といつて避けた表現の一つです。

あまりにコテコテの敬語を聞き慣れてしまうと「あつさり言ったら失礼なのでは」と思いますが、多くの方がそういう気分になることで、益々その傾向がエスカレートしているように感じます。敬語は程ほどに。

（いづようこ/株高知放送報道制作局アナウンス部長）

高知市文化プラザ かるぽーと 1~2月の事業のご報告

アーティストバンクプログラムVol.6 ライブパレット

1月24日、アーティストバンクプログラムの第六弾「ライブパレット」を小ホールで開催しました。

新年ということで、今回は「生田流菊由楽会」と「正曲一絃琴白鷺会」の邦楽二団体を中心にお正月らしい曲を中心とした構成でしたが、間に一人芝居の「武井岳史」さんの落語「気の長短」「がまの油」を挟んでひと味違った雰囲気的舞台となりました。



学校派遣事業

1月23日~2月28日にかけて、介良潮見台小学校・潮江東小学校・一ツ橋小学校の三校に、アーティストバンク登録のアーティストを派遣して生の芸術を体験してもらう学校派遣事業を行いました。

介良潮見台小学校には洋楽アンサンブル「Tutti」、潮江東小学校には箏の「小松しのぶ」さん、一ツ橋小学校にはフルートの「中川美紀」さんが訪れて演奏し、小学生たちは普段授業で目にする機会のない楽器を間近にして興味津々でした。

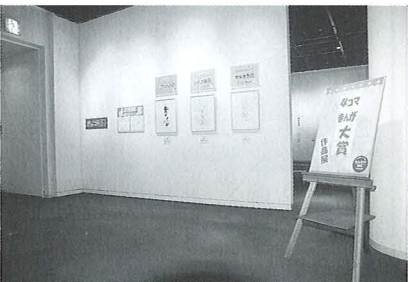


2006まंगाの日記念「4コマまんが大賞」作品展

12月16日~2月12日、横山隆一記念まんが館企画展示室で、2006年の「まंगाの日記念「4コマまんが大賞」」に応募された作品の発表として「2006まंगाの日記念「4コマまんが大賞」作品展」を開催しました。

一般部門、ジュニア部門のフクちゃん大賞をはじめとする入賞作品や一次審査通過作品、合わせて153点を展示。557人が来場し、アイデアあふれる作品を楽しみました。

また期間中、観覧者のみなさんに一次審査通過作品（入賞作品を除く）の中から、好きな作品を選んでもらう「ギャラリー賞」投票コーナーを開設。皆さん投票用紙を片手に、熱心に作品を見ていました。



美術中級講座「陶芸/彫塑スキルアップカリキュラム」

美術分野での人材育成・レベルアップを図る、中級者向けの美術中級講座「スキルアップカリキュラム」を、今回は「陶芸」と「彫塑」、二つの分野で実施しています。

陶芸教室の講師は川村雄二先生、彫塑教室の講師は西本忠男先生をお迎えし、陶芸8名、彫塑10名が受講。講師の指導のもと、新しい技法に挑戦したり、受講者同士がそれぞれの作品や手法を評価したりと、一つ一つを自分の制作に活かし、充実した制作が進んでいます。





どこの街??

長い間開発の手の入らなかった高知駅北口の界隈も、この数年で劇的に風景が変わった。この一帯、かつて美しい景観だったというわけではないけれど、今この一帯に立ち上がる街並を見ると、何十億かけても何十年かけても、結局はこんな誰の記憶にも残らないような街並しか作れないのかと溜め息が出る。景観とは何か。そのことに対する自問自答が、この街には決定的に欠けているように思える。(竹村直也)

高知
遺産
The Kochi Heritage 2006

風俗

米原万里『打ちのめされるようなすごい本』を読む

解説者の井上ひさし氏に言わせると、「書評ほど割の合わない仕事はない」そうだが、米原氏は真正面からそれに取り組み、膨大な読書量をこなされている。通訳者の要諦は文学書を読みこなすことという著者の面目躍如である。それにしても収録された週刊誌や新聞に掲載の書評は二百編を超えて

五百余ページの大部だし、タイトルに小ささか腰が引けたが、ゴルバチョフやエリツインが名指しで依頼する国際的同時通訳者でありながら、見識豊かで大胆率直、それでいて笑いを失わない著書の多数に触れていたのが、積極的に買い求めた。(50年4月東京生まれ06年5月癌再発で逝去、56歳)

いる。プラハのソビエト学校育ちという経歴なので、やはりロシア関係の本が多いが、旺盛な好奇心の著者は、犬や猫など動物好きには堪えられない本も選ばれているし、丸谷才一や大江健三郎への入門書にもなっている。それでいてシモンエタを楽しむ余裕も十分だ。

ともあれ、祖父は貴族院議員、父は衆議院議員、本人は東大大学院卒という遺伝子の優秀さには圧倒される。ただ書評最後の方には癌関係の本が多いのは胸を打つ。特に「癌治療本を我が身を以って検証」は亡くなった月に執筆された作品。冷静で泣き言のない筆遣いは壮絶だ。手術、抗癌剤、放射線に次ぐ第4の癌治療として、リンパ球を増殖させる「免疫療法」を提唱する院長とのやりとりには、息を呑むものがある。(3)

第23回写真コンテスト 高知を撮る 入選作品展

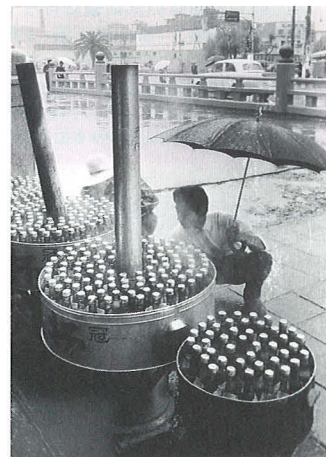
高知の懐かしい風景や出来事、人々の暮らしを記録した写真や、撮影者の好きな高知を表現した写真など、コンテストの入選作品約70点を展示します。

会期：3月13日(火)～3月18日(日)
時間：午前10時～午後5時
場所：高知市文化プラザかるぽーと
7階市民ギャラリー第4展示室

※入場無料

主催：(財)高知市文化振興事業団
〒780-8529 高知市九反田2-1
電話088-883-5071

協賛：富士フイルムイメージング株式会社
後援：株式会社ラボネットワーク
高知県カメラ商組合



第22回写真コンテスト
記録写真部門 特選「花見の頃」川崎善一

今号の表紙

第2回 Concours des Tableaux
美術作品コンクール 最優秀作品
「陸橋」 今井美琴

朝のもやのようなもののなかで、まだ物にきちんとした普段の色がついてないみたいに見えました。

これだぁ!と思い描きました。

(いまいみこと/高知北高校在学)



高知を撮る

第22回写真コンテスト入賞作品

月光仮面

(平成17年 山田えびす商店街)

酒井 良昌

今回の北見での都市ガス事故には心が痛んだ。通常キッチン等にはガスの検知器が設置されているが、下水管からトイレに侵入することなど、まさに想定外である。都市ガスに含まれる有毒成分の一酸化炭素は無臭である。そのため、不快な臭いを人工的に添加して、危険を知らせる工夫をしている。

人類はその長い歴史の過程で、有毒ものを不快に感じるように嗅覚を進化させてきた。腐敗した物や糞便が「臭い」のは、それらを食べると下痢をすることを「本能」が指示するからである。動物の糞を幼虫の餌にするフンコロガシなどは糞の臭いを快く感じるに違いない。

人間は、有毒な硫化水素やアンモニアなどは不快に感じるが、同じ有毒ガスでも一酸化炭素のように、全く「無臭」の物もある。

視覚でも嗅覚でも感知することができない物に、原子からの放射線

「嗅覚」



風俗歳時記

がある。困ったことに、放射性廃棄物はその「汚なさ」の持続や「怖さ」に関しては何のような廃棄物にも負けない。

自然界では腐敗した肉片や糞便のような物でも、微生物により無毒な物質に分解されてリサイクルしてゆく。一見汚くてもそれは一時的な物である。もちろん、「放射能」も長い年月では減衰してゆくが、それは数千年、数万年かけての話である。

汚くて、怖くて、いつまでも浄化されない物は地中深く埋めるしか処理の方法がない。狭い日本で、そのような危険な物を処理しようとするとどこに問題の根源がある。終末処理ができないのなら事業そのものを見直すのが常識というものである。為政者は、この問題に伴ううっさん臭さを感じる嗅覚を持つてほしい。

(略)

高知漫画集団・高知漫画グループくじらの会 合同原画展

入場
無料

まんが・漫画・マンガ展! 2007



山北三砂子
「猫の手を借る“モップ”」
(高知漫画集団)



ゆうき・ふみや
「猫のお仕事」
(高知漫画グループくじらの会)

期間 2007年 3月3日(土) ▶ 3月31日(土)

場所 横山隆一記念まんが館 企画展示室

時間 / 9:00 ▶ 19:00

休館日 / 月曜日

● 似顔絵コーナー

【高知漫画集団】
3月3日(土)・4日(日)・10日(土)・
11日(日)・24日(土)・25日(日)
【高知漫画グループくじらの会】
3月17日(土)・18日(日)
■ 時間: 10:00~16:00
■ 場 所: まんが館企画展示室入口
■ 参加費: 色紙代100円+チャリティー

● まんが体験イベント

【高知漫画集団】
3月24日(土)・25日(日)
■ 時間: 13:30~15:00
■ 参加費: 200円 ※要申込
■ 場 所: まんがライブラリー

● まんが教室

【高知漫画グループくじらの会】
3月17日(土)・18日(日)
■ 時間: 13:30~15:00
■ 参加費: 300円 ※要申込
■ 場 所: まんがライブラリー

楽しくまんがを描こう!



地元高知に根付いた活動を行っている二つのまんがグループ「高知漫画集団」「高知漫画グループくじらの会」の合同原画展を開催! 「まんが王国・土佐」ならではの、両グループの個性あふれる原画の数々をぜひご覧下さい。

お問い合わせ ● 〒780-8529 高知市九反田2-1 高知市文化プラザかるぼーと内 横山隆一記念まんが館
(TEL)088-883-5029 (FAX)088-883-5049 (URL)http://www.bunkaplaza.or.jp/mangan/ 主催 ● (財)高知市文化振興事業団 横山隆一記念まんが館 共催 / 高知漫画集団・高知漫画グループくじらの会



アーティストバンクプログラム vol.7

Live Palette ライブ パレット

県内で活躍するアーティストたちを支援する「アーティストバンク」によるシリーズプログラム第7弾。
今回はピアノソロからアンサンブルまで、バラエティに富んだ演奏をお楽しみください。



福田明子 (ピアノ)

【演奏曲】
デュティユー/コラールとヴァリエーション
ショパン/ノクターン第17番 ほか



B-NOTE (ピアノ・声楽)

【演奏曲】
ヴェルディ/オペラ「椿姫」より『乾杯の歌』(ソプラノ)
平井康三郎/幻想曲『さくらさくら』(ピアノ) ほか



Tutti (ピアノ・チェロ・バイオリン)

【演奏曲】
J.マズネ/タイスの瞑想曲
W.A.モーツァルト/デュオ K.423 ほか

● 日時: 3月16日(金) 18:30開場 19:00開演 ● 会場: 高知市文化プラザかるぼーと小ホール
● 料金: 全席自由 一般1,500円 小中高生800円 ● お問い合わせ: (財)高知市文化振興事業団 088-883-5071